

魅せられて 私の「歌」道標

高橋和巳へ

高橋さん、あなたが第一回「文藝賞」受賞作『悲の器』でデビューした一九六二年に、私は早大一文西洋哲学科に入学しました。表現を求めて友人と、文芸サークルの部屋をノックしているうちに、短歌会に足を踏み入れてしまったのです。その日の様子を、私はこんなふう書いています。

「五月であったか六月であったか、ほのかに暗い一室がそこに在った。質素な木の長椅子を軋ませながら、激しい議論が展開されていた。机の上は、謄写版、アルミの灰皿、煙草の吸殻の詰まった牛乳瓶、刷り損じた藁半紙(わらはんし)などが散乱していた。その机を四角く囲み、十人ばかりが口角泡を飛ばしていた」。

「当時短歌会には太田比呂史、佐佐木幸綱、金指弘剛、山本貞夫、牛島伸、伊勢勇、持田鋼一郎、東野文恵、中野武彦、小亀富男、黒田和美など気鋭の学生歌人たちが集っていた。安保闘争の余燼(よじ)くすぶる作品合評会は熾烈なものがあり、個々の敗北の傷みは、他の作品を安易に許容しようとはしない、そんな自負と誇りにつらぬかれ



福島泰樹

ているかのようにであった。早口でまくしたてる彼らの口から、塚本邦雄、岡井隆、寺山修司、岸上大作の名が発せられないときはなかった」。

六〇年安保闘争を経て短歌の世界は最も熱い内実を見せていたのでありますが、クラスメートたちが私に浴びせたのは曰く「風流」、曰く「趣味」、曰く「感傷」等の嘲笑でありました。

私もまた彼らの批判を受け、短歌を背負って立つだけの文学的自覚に欠けていたようです。私を酔わせたのは萩原朔太郎や中原中也といった詩人たちでした。

「八月の石にすがりて／さち多き蝶ぞ、いま、息たゆる。／わが運命めを知りしのち、／たれかよくこの烈しき／夏の陽光のなかに生きむ」。「運命さだめ? さなり、／あ、われら自ら孤寂なる発光体なり!／白き外部世界なり。」

わけても心惹かれた詩人は伊東静雄でした。ことあるごとに私は、静雄を暗誦していました。報いられることを期待しない愛(生)。自

らの存在を白き外部世界と感じるまでに、激しく燃焼させ発光させてしまう愛(生)。そうだ。美しいものは、自分のためにのみ深く美しい木陰をつくればいいのだ。死とは、深く美しくそして限りない断念である。二十歳の私は、このようにこの詩を読んできました。短歌で静雄の「運命」を書けるか。

少女死するまで炎天の縄跳びのみづから

の圓駆けぬけられぬ

塚本邦雄

やがて私はふとしたことから学内闘争の最前線で戦うこととなるのです。酒浸りの孤独な文学青年もどきの私にとって、それは青天の霹靂へきれきであった。闘いは日々盛り上がっていった。怒りに全身を震わせて私は学内を駆けずり回っていた。そして迎えた秋、嘘のようなキャンパスの平静さにいたたまれず、遠ざかっていた部室に入り直すようになっていました。

そんなある日、件の机くわだの上でガリ版刷りのこの一首と出会ったのです。塚本邦雄との出会いであった。それは、前衛短歌との、現代短歌との、いや、自らの歌との出会いといってもいい。短歌で「運命」を書いた奴がいるのだ。わずか一行二十七文字でそれを歌いえる短歌とは、そまなにもものぞ。私はなにかを跳躍し、なにかを確実に乗り越えたのです。

付き合いが始まったばかりの級友であり詩友である伊藤一彦に、この感動を語った。早大短歌会の機関誌「27号通信」に、ヘルダーリンやリルケ、伊東静雄などの詩を引きながら、ハイデッガーやヤスパースから学んだ(まことに拙劣な)存在論的解明を試みたものその頃のことでありました。

暗い冬の教室でひとり佐佐木幸綱から借りた塚本邦雄『日本人霊歌』を書き写していた。六四年の学内闘争を経て、塚本邦雄に出会い、詩の、はたアイロニーのなんたるかを、短歌がまぎれもなく詩や小説に互して、自らの思想を表現しうる器であるということ、存分に思い知らされたのです。

高橋さん、あなたの小説を読み漁るようになったのもその頃のことです。あなたが活躍した時代と時を同じくしながら、文学を考え、短歌に向かいえた私は幸運でありました。この間、あなたは長編『憂鬱なる党派』を書き改め、「文藝」に『日本の悪霊』、『墮落』、『散華』を発表し、「朝日ジャーナル」に『邪宗門』を連載した。評論集『文学の責任』、『孤立無援の思想』は窮措大きゆうそくだいであった私に、文学とは何か、人はどのように決断しどのように生きなければならぬか、といったことを示唆してくれました。

流血に汚れしシャツを脱がんとも掌はひ

とくれの塩のごとしよ

青春のなみだ口惜しく 脱衣所のはだか

の群れに刺さる陽の雨

ナツプ・ザック胃のかたちして吊られた

りみずいろのみの夏すぎゆかむ

早稲田短歌会に入部し、三年の歳月が過ぎました。短歌会の機関誌に発表した当時の私の短歌作品です。フォルムとの格闘のあとが幾分かはうかがえるかもしれません。短歌とは、一にこのフォルムとの闘いといつていいかもしれません。フォルムとは日常を拒絶す

る力です。この力なしには、フォルムは一行の詩として立ち上がってはきません。短歌は日常の中に、だらしなく寝ころぶ詩型ではありません。ダウンをはねつけ必死に立ち上がろうとしてみせる詩型なのです。

短歌会の部室では、太田洋佑、名取弘文、三枝昂之ら活きのいい後輩たちが、相変わらず激しい議論を展開していました。

一隊をみおろす 夜の構内に三〇〇〇の
髪戦ぎてやまぬ

もはやクラスを恃たのまぬゆえのわが無援
笛囁むくちのやけに清しき

泥靴も、わが蓬髪も、髭面も、恕せよ肩
にもたれて眠る

鯖のごとくカブト光れり われ叛逆すゆ
えにわれあれ存在理由レゾン・ダイトル

その日からきみあたらぬ仏文の 二月
の花といえヒヤシンス

ここよりは先へゆけないぼくのため左折
してゆけ省線電車

そして迎えた早大大学費・学館闘争。後に私は第一歌集『バリケード・一九六六年二月』でこのように歌っています。それはやがて大ききなうねりとなって全国の大学へ波及し、六十年代後の学園闘争へ

と燃え盛ってゆきました。あなたは、それを京大の教官として体験することとなるのです。

すでに卒論は提出してありましたが、踏ん切りをつけるために留年したので。新たに大林明彦らの新入生を加え、あなたの研究会が短歌会でもたれたのもこの頃のことです。そして、秋の早稲田祭にあなたを召喚して講演会を開催しようと、部員は結束していったのです。

学内集会の壇上で、私が「短歌会を代表して今日ここに結集した全学の学生諸君に熱烈な連帯の挨拶を送ります」とアジテーションを開始した途端、「ナンセンス！」という野次が返ってくるほど、短歌は現実からかけ離れた詩型と思われていました。その短歌会が、この年の早稲田祭のメインとなるべきあなたの講演会を企画したのです。

講演の依頼に行った三枝と名取は二度までも断られ、やむなく五年生の私が出向く番となったのです。「三顧の礼」をとられたのでは仕方ないと、あなたは微笑し、引き受けてくれたのであった。

講演の当日、私はあなたと二人、正門前のレストラン高田牧舎にいた。学生時代を憶れてやまなかつた人と一期一会の酒を酌み交わしていたのだ。そのときあなたは、静かな口調でこう言ったのだ。「福島さん、あなたは短歌で号泣することができませんか」。

会場の小野梓講堂は立錐の余地もなかった。壇上に立った私は、開口一番「野次妨害をする者は物理的に排除する！」と、会場を一喝したのであった。いまだ学内は騒然としていた。あれから三十二年、講演であなたが語った「悲しみの連帯」という言葉を、いまでもときおり思い起こすことがあります。

学生時代の筆者（1966年頃）



黒時雨の歌

福島泰樹

原稿用紙の上にはたはしる時雨あらば孤立
無援よ濡れてゆくべし

君が居て君をとり巻く若草の 京大パルチ
ンなるヘルメット見ゆ

敗北の涙ちぎれて然れども凛々しき旗をほた
めかさんよ

しろがねの響よ、乳香よ、白桃よ、わが渺茫
の山河をゆくに

嗚呼！そして落暉の中を左折してゆきたる
省線電車よ何処

福島泰樹

(ふくしま・やすき)

自選歌五首直筆

1943年東京下谷に生まれ、早稲田大学文学部を卒業。69年、歌集「バリケード・一九六六年二月」で鮮烈なデビュー。以後、歌謡の復権を求めて「短歌絶叫コンサート」という新たなジャンルを創出、600ステージを越える。86年11月、世界50カ国の詩人と自作の朗読を競い合う第6回ブルガリア国際作家会議コンクール詩人賞を受賞。歌集19冊の他、評論集、小説、レコード、CD、ビデオなど著作は60点を数える。

月光の会を主宰、文藝季刊雑誌「月光」を編集発行。90年、第16歌集「さらばわが友」で「90年度詩人賞」、95年、ラジオドラマ「紫陽花の家」で「第21回放送文化基金 脚本・演出賞」を受賞。渋谷ジャン・ジャンでの定例コンサートの他、毎月10日、東京の吉祥寺・曼茶羅で月例絶叫コンサートを開催中。

原稿用紙の上にはたはしる時雨あらば孤立
無援よ濡れてゆくべし

君が居て君をとり巻く若草の 京大パル
チサンなるヘルメット見ゆ

嗚呼！そして落暉の中を左折してゆき
たる省線電車よ何処

高橋さん、学生たちから蔑まれた短歌が、学生たちによってバリケードの中で回し読みされる時が来ました。六九年秋に刊行された『バリケード・一九六六年二月』の歌たちが、立て看に書かれ、垂れ幕となって校舎を覆ったのです。

高橋さん、短歌は呼びかけ、語りかけの詩型です。歌謡の復権・肉声の回復をスローガンに初めて自作の朗読を開始して二十七年、「短歌絶叫コンサート」も六〇〇を越える過激なステージを踏んできました。毎月十日、東京・吉祥寺のライブハウス「曼茶羅」で月例コンサートを開始してはや十五年になります。この間、あなたが問うた「短歌で号泣できるか」という問いを忘れずにきました。

一九九四年晩秋、私はこの『バリケード・一九六六年二月』刊行二十五年を自祝し、高橋和巳に献ずる歌集『黒時雨の歌』を刊行しました。バリケードから数えて十八冊目の歌集です。高橋さん、短歌は号泣の詩型であります。

敗北の涙ちぎれて然れども凛々しき旗を
はためかさんよ